



季刊

弥生の出雲王に出会える



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

第27号 (2017年10月)

★ギャラリー展

日本遺産認定記念

「日が沈む聖地の考古学」

10月18日(水)～2月5日(月)

【入場無料】

今年4月、「日が沈む聖地出雲」が、日本遺産に認定されました。日本遺産は、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定しています。

「日が沈む聖地出雲」のストーリーを支える構成文化財は、日本遺産の認定を契機に次第に注目されつつあります。

しかし、このストーリーの舞台には構成文化財の他にも、稲佐遺跡、ひろげ遺跡、高天原古墳、鷺浦古墓など、特徴的な文化財があります。今回のギャラリー展では、あまり知られていないこれらの遺跡にスポットライトを当てて紹介します。

稲佐遺跡(大社町杵築北)

1944(昭和19)年に遺物が採取されたのをきっかけに、遺跡の存在が明らかになりました。遺物は弥生時代後期(3世紀頃)から古墳時代前期(4世紀頃)にかけての

土器が多く、この遺跡周辺で集落が出現した時期を示しています。

「国譲り神話」の舞台である稲佐の浜に隣接する遺跡として興味深く、出土品は市の指定文化財になっています。

ひろげ遺跡(大社町日御碕)

県道大社日御碕線改良に伴い、平成8年に現在の赤石トンネルが抜ける丘陵の海側斜面で発掘調査が行われ、弥生時代後期(3世紀頃)から奈良時代(8世紀頃)の土器が出土しました。

急峻な山腹の裾部に祭壇状の遺構のほか、火を使用した痕跡や赤く塗られた土器などが見つかったことから祭祀遺跡とされ、この地の「祈り」の様相を示す遺跡として注目されています。



遺跡の位置

高天原古墳(大社町日御碕)

中山湾の北西から海に向かって舌状に延びる丘陵では、昭和20年代に古墳時代後期(6世紀後半)の須恵器や大きな石が見つかりました。これらは古墳の存在を示唆するとされ、この地点は地名に基づき「高天原古墳」と呼ばれています。『古事記』や『日本書紀』の世界観を彷彿とさせるこの地名は、その由来がいかなるものか興味を駆り立てます。

鷺浦古墓(大社町鷺浦)

古い記録が残っており1881(明治14)年に発見されたことが分かれます。埋まっていた蓋の付いた壺は、信楽焼の壺に備前焼の鉢を蓋にしたもので、記録によると「壺ノ側二人骨ト思ワシキモノ」が埋めてあったようです。

この壺と鉢は市の指定文化財で、埋められた時期は戦国時代末(16世後半)から江戸時代初頭(17世紀初め)と考えられています。

この他にも海岸線の話題性に富む遺跡を、出土品や写真を交えて分かりやすく紹介したいと思えます。たくさんのお楽しみにしたいと思います。

(三原一将)

★速報展示コーナーの紹介
発掘出土品の整理作業

当博物館は、西谷墳墓群のガイダンス施設ですが、それ以外にも様々な役割を持っています。博物館としての展示や管理業務だけではなく、有形無形の文化財保護に関することや、埋蔵文化財の保護や発掘に係る業務なども、館内で行っています。

博物館に入り正面右側を見ると大きなガラス窓が目に入ります。

来館されたお客様から、時々、「何の作業をしているのか」「あの道具は何か」などの質問を受けることから、現在、ガラス越しに見える作業の内容を、パネルで紹介しています。このパネルと職員が使っている道具を見比べてもらうと、何の作業をしているのか、よくわかると思います。

作業をしている職員は、ガラス越しに見られていることを知っていますが、集中するあまり見られていることを、すっかり忘れてしまっていることがあります。

作業に集中して、ふとガラス窓に目をやると、こちらを熱心に見ているお客様と眼が合い、びっく



ここから作業の様子が見えます

りします。

さて、この部屋でいったい何の作業をしているかというと、発掘現場から持ち帰った土器などを洗浄したり接合したりといった整理を行っています。

10月中は、出雲市湖陵町常楽寺の、京田遺跡から出土した縄文土器の整理作業を中心にを行います。縄文土器の破片が部屋一面に並びますので、この様子をぜひご覧ください。

(原 俊二)

★研究ノート⑱ 企画展

『出雲国風土記』

を引用した棟札

【出雲市斐川町三絡・波迦神社】

市文化財課による神社建造物調査の一環で、波迦神社を調査した際、同社に25点の棟札が現存することを確認しました。

棟札とは、建物の名称や施主、上棟の年月日を記して建物の棟木に打ち付ける板のことです。

波迦神社の棟札を詳しく調べたところ、1551(天文20)年と1604(慶長9)年の棟札に、『出雲国風土記』の記事が一部引用されていることが分かりました。合祀される日本武命と神社が所在する建部郷との関係について述べた文章「この社の峯に天降り坐して」

が、『出雲国風土記』建部郷条の文章「その山の峯に天降り坐して」とほぼ一致するのです。

「天降り坐す」は『出雲国風土記』



でよく見られる文句で「峯」字も共通することから、『出雲国風土記』を参考に作った可能性が高いと言えます。

733(天平5)年に『出雲国』でまとめられた『出雲国風土記』ですが、江戸時代の1634(寛永11)年に、尾張藩主徳川義直が日御碕神社へこれを奉納するまでは、出雲国内での『出雲国風土記』の存在は知られていませんでした。

今回確認した棟札は寛永以前のものです。江戸時代までの出雲国において、『出雲国風土記』がどのように認識されていたのか窺い知ることができるとなる資料と言えます。

(高橋 周)

慶長9年の棟札

2行目下段に「此社峯(仁)天降坐(志弓)」と見える。

★日本遺産

日が沈む聖地出雲の文化財 (第1回)

今春「日本遺産」に認定された「日が沈む聖地出雲」は、23件の文化財とともにつむぐ「夕日」にまつわるストーリーです。その舞台は、出雲市北西部の海岸線です。南から北に進むにつれ、白砂の砂浜が、岩肌むき出しの荒磯へとダイナミックに変化する様子は、まさに神業と例えるにふさわしい景観です。

これから数回にわたって、ストーリーを構成する文化財の魅力を一エリア毎にご紹介していきます。



① 稲佐の浜

大社・稲佐の浜エリア
『古事記』『日本書紀』に描かれた国譲り神話の舞台。出雲大社か

らは約1kmという近さです。夕暮れ時の稲佐の浜に立つと、紅に染まる空が渚にたたくむ弁天島のシルエットを際立たせ、幻想的な光景が広がります。



② 出雲大社本殿ほか

オオクニヌシが国譲りとひきかえに建立を求めた社。『日本書紀』では「天日隅宮」と呼ばれ、「日が沈む聖地に建つ宮」を意味します。国宝・本殿の内部では、御神座が夕日の沈む西を向いています。境内には全国の神々を迎えた際の宿舎となる十九社など多くの社殿があります。

③ 神迎神事

旧暦10月10日の夕刻に、稲佐の浜で執り行われる出雲大社の神事。この神事により八百万の神々が全国から出雲に参集し、「神議り」といわれる縁結びの会議を行

うとされます。旧暦10月を全国的には「神無月」といいますが、こ出雲では「神在月」と呼びます。

④ 上宮

出雲大社の摂社で、全国から集まった神々が「神議り」をされるという社です。旧暦10月11日から7日間はこの社で神在祭が行われ、人々は歌舞音曲を控え静かに過ごします。

⑤ 大土地神楽

大土地荒神社の氏子により三百年以上伝承されてきた出雲神楽。神社の例祭では夕刻から夜を徹して舞われるほか、近年では稲佐の浜での「夕刻篝火舞」で伝統の技を披露しています。

⑥ 屏風岩

稲佐の浜から50mほど東に入った山手にある岩。この岩陰でオオクニヌシが「国譲り」の話し合いをしたという伝承があります。

出雲神話にちなんだ神社や登場地を巡って、日が沈む聖地の祈りの歴史を体感してみませんか。

(伊藤はるか)

★第52回出雲市無形文化財発表会 11月19日(日)



神楽「大蛇」の一場面

無形文化財に指定されている神楽や獅子舞など、地域の誇る伝統芸能が一堂に会して上演します。神話のふるさと「出雲」に息づく技と心を体感ください。

● 時間 10時～15時30分

(開場 9時30分)

● 場所 ササノオホール(佐田町)

● 入場料 前売り 400円

当日 500円

中学生以下 無料

※当博物館で前売券販売します。



獅子舞



子ども神楽

★講座・教室のご案内
▼出雲弥生の森博物館 職員リレー講座

出雲の文化財や歴史、最新の発掘成果について、文化財課の職員がわかりやすく語ります。

10月7日(土)

徹底解説！日本遺産

「日が沈む聖地出雲」

【講師】三原一将

10月21日(土)

上塩冶築山古墳の実像

【講師】坂本豊治

▼館長講座

11月11日(土)

とぶとりの飛鳥と

やくもたつ出雲 その一

1月13日(土)

とぶとりの飛鳥と

やくもたつ出雲 その二

【講師】花谷 浩(当館館長)

右の講座はいずれも

- 時間 14時～16時
- 会場 たいけん学習室
- 受講料300円 ●定員80名

電話・FAX・博物館HP等でお申し込みください。

▼秋の体験教室

弥生人の方法でご飯を炊いて、

食べてみよう！

11月18日(土) 14時～16時

【講師】濱野浩美氏

(米子市教育委員会)

- 参加無料 ●募集人数20名
- 集合場所 たいけん学習室

事前申込みが必要です。電話でお申し込みください。

★博物館アテンドコーナー

こんにちはアテンドです。

今回は、市内にある、魅力的な古墳を紹介します。

JR出雲市駅東約800mにある今市大念寺古墳。出雲で最大規模の前方後円墳で、石室内の家形石棺は国内でもトップクラスに入る大きさです。他にも、規模や大きさなど、職人の技が光る石室の壁や石棺。入り口や内部の様子など、様々な特徴を持っていきます。

これから古墳巡りを楽しむのにもよい季節になりました。

深まりゆく出雲の秋を散策してみませんか。



★館長古采蒔

夏の企画展では「解明！古代の『出雲郡』」を開催しました。出雲市という行政地名の起りは、古代の地名である出雲国出雲郡出雲郷にあります。斐川町出西あたりがそのエリアにあたることは、今回の展示からおわかりいただけたでしょう。

近代になり、これらの行政地名は廃止されていきました。1896(明治29)年、出雲・神門・楯縫の三郡が合併して「簸川郡」となりました。日清戦争が終結した翌年のことでした。

出雲市の前身となる「出雲町」ができたのは1941(昭和16)年2月11日のことでした。今市・大津など九町村が合併し、その年の11月3日に市制施行がなされました。初の市議会議員選挙の投票は12月7日、旧日本軍が真珠湾攻撃を行う前日のことでした。「古代のロマン」をさそう市名「出雲」ですが、その誕生の背景には当時の不安な世相があったことを記憶しておきたいものです。

記憶といえば、文化庁主催の「発掘調査された日本列島二〇一七」展覧会には、徳島県海陽町にある

石碑の写真と拓本が展示されました。石碑には、1605年にこの地を襲い百人余りの命を奪った津波の記録と、その102年後に再び襲われたものの、一人の死者も出さなかつた事実とが刻まれています。記憶を石碑という記録で残し、後世の災害を未然に防いだ先人の知恵に感嘆しました。

6年前の東日本大震災は、平安時代の869年に起きた貞観地震と震源域が近似しているといわれました。貞観地震の11年後、ここ出雲で大地震が発生しました。寺社や役所や民家が倒壊し、余震が一週間も続いたと記録にあります。「出雲地震」ともいわれるこの災害、さて、どれだけ私たちの記憶に残っているでしょうか。

(発行) 出雲弥生の森博物館

2017年10月

〒693-0011
島根県出雲市大津町2760
(TEL) 0853-25-1841
(FAX) 0853-21-6617
(E-mail) yayoi@city.izumo.shimane.jp
http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

- 入館料 / 無料
- 開館時間 / 9:00～17:00 (入館は16:30まで)
- 休館日 / 火曜日 (祝日の場合は翌平日) 年末年始

